

死者と生者を結ぶ物語

—「浄土でまた会える」という意味づけを巡って—

川 島 大 輔

1. 問題と目的

近年ターミナルケアや尊厳死など、死を巡る問題についての議論はますます活発化してきている。そのような状況において、古来より死の問題への解決策として死後の理想世界という物語を提供してきた宗教に対し、臨床現場から寄せられる期待は少なくない。しかしながら宗教の恩恵を最も享受するはずの個人が、宗教という社会文化的文脈との関わりを持ちながら、どのように死を意味づけているのかという心理学的視座からの研究は、ごく少数を除き、これまで十分に行われてきたとは言い難い(川島, 2005)。

特に現在の高齢者は、幼少より生活のあらゆる場面において素朴で豊かな信仰の中に育ってきていることから、高齢者の死の問題と宗教との関係性を扱うことが必要である。そして岸本(1973)が述べるように、人間の死後に理想世界を描き出すことは、人類の歴史を通じてもっとも広く行われた工夫であるとすれば、研究の焦点は死後の理想世界がどのようなものであるか、意味づけのヴァージョンと、その意味づけの担う機能を明らかにすることに向けられるであろう。

岸本によれば「人間にとって何より恐ろしいのは、死によって、今持っている「この自分」の意識が、なくなってしまうこと」(岸本, 1973: 17)であるという。それ故、死後の理想世界という物語の担う最も顕著な機能の一つは、死の後も天国あるいは極楽浄土において自らが存在し続けると考えることで、かけがえのない自分が消えてしまうという死への恐怖を緩和せしめるということであろう。事実、死後の世界に対する信念や死の受容が、死の恐怖と負の相関を有することが報告されているが、それらの尺度を構成する質問項目の多くは、自己自身の連続性や一貫性に関する記述、たとえば「死は新たな輝かしい生を約束するものである。」や「死後の世界で自分がどうなるかと、私はとても悩んでいる。」である(e.g. 金児, 1995; 河合・下仲・中里, 1996)。またこの機能は、Lifton(1973)によって提唱された、人間に固有の衝動の一つである「象徴的不死 symbolic immortality」の概念のうち、肉体は滅びても魂は死なず神の国で永遠に命を保つ「神学的不死」と言い換えることも可能であろう。

しかし死後の理想世界という物語には、自己の連続性あるいは不死性の感覚を紡ぐという機能に加えて、自己と他者との関係性を紡ぐという機能がある。たとえば次の語りは高木(2001)がターミナルケアの現場において、出会った人々の死に対する有様を紹介したものの一部である。

「お前があのお世に行く時には僕が迎えに来る。しかしもしそれに気づかずに迎えにこなかったなら、天国の入り口から入って一番後ろの端の席にいる自分を探してくれ。子どもたちの最後には二人で迎えに行こう。」

「主人はこの席で私を待っていてくれるんです。天国という所は、こんな所なのでしょうか。私はもっと楽しい所、いや、もっとにぎやかな所だと思っていましたが……。でも主人が待っていてくれる所なら、どんな所でもいいのです。」(高木, 2001: 16-18 下線は筆者によるもの)

このような事例は枚挙に暇がなく (e.g. 信楽, 2001; 鈴木, 1996), それらの多くが「また会える。」あるいは「待っていてくれる。」といった語りが、死に逝くものの死への恐怖を緩和し、また遺されるものの死別による悲しみを和らげることを示唆している。このように死後の理想世界という物語の果たすもう一つの機能、すなわち死者と生者を結ぶことで死の恐怖や悲しみを緩和するという機能の重要性が多く事例報告から明らかとなっている一方で、この機能に対する十分な実証的研究の蓄積がなされてきているとは言い難い。たとえば、確かに質問紙等において死者と生者との関係性に関する記述 (たとえば「死後、愛する人との再会を楽しみにしている。’)は存在するものの、その内実を丁寧に検討したものは見当たらないのである。したがって高齢者の死の問題と宗教の関連を問うにあたり、死後の理想世界がどのように死者と生者を結びつけているのかを実証的に明らかにすることが必要である。

ところでこの死者と生者を結ぶ機能に注目する際、やまだと同僚による一連の研究が参考になる (やまだ, 2000; 2006; やまだ・河原・他, 1999; やまだ・田垣・他, 2000)。やまだらはヒーローや友人の死という出来事によって断絶された自己と他者との関係性がどのように再構築されるのかを精緻に分析することで、死者と生者を結ぶ「物語」の重要性を示唆している。また物語とは「文化の物語を原典にして、それを引用しながら、私ヴァージョンに語りなおす作業 (やまだ, 2006 pp.46)」なのであり、とくに死に直面した際には宗教や倫理の物語などの「聖なる物語」が多く語られるという。実際、やまだらによる一連の研究においても「文化の物語 (伝承や昔話, 小説など)」と「聖なる物語」そして「私の物語」が掛け合わされていたことが明らかになっている。しかしながら高齢者自身が、宗教の提供する死後の理想世界という物語をどのように引用し、語りなおしているのかは未だ明らかにはなっていない。

2. 目的

上記の問題点を鑑み、本研究では、死後の理想世界という物語をどのように引用しながら、私ヴァージョンの物語を構築しているのか、そしてそれがどのように死者と生者を結びつけるのかを明らかにすることを目的とする。

3. 方法

3-1. 調査対象者

質的研究においては、研究の問いを明らかにする特徴的で典型的なサンプリングを実施することが必要である (能智, 2004)。したがって対象者は、死後の理想世界という物語の原典をどのように引用することで私ヴァージョンの物語を構築するのか、そしてそれによって死者と生者がどのように結ばれるのかを明示的に語りうる存在でなくてはならない。そこで本研究では老年期にある浄土真宗僧侶を対象とした。

浄土真宗に焦点化したのは、西方極楽浄土の思想を通じ日本人の心性に深く影響しており、またその宗教的関わりの中核的要素の一つが、浄土で再び見えることへの確信を意味する「俱会一処¹⁾」だからである(川島, 2004a)。また僧侶に焦点化したのは、宗教にもっとも近い立場にあることから、物語の原典と私ヴァージョンの物語の相違をより明瞭に捉えられるためである。

具体的に本研究では、老年期にある10名の浄土真宗僧侶(男性9名, 女性1名; 平均年齢は79.6歳 (range, 74-88))を調査対象とした。

インタビューでは、川島(2003)を基にして、あらかじめ作成されたインタビューガイドを用いた半構造化インタビューが行われた。ただし本研究では、インタビューガイドのうち、特に「身近な他者との死別体験」、「自己の死の意味づけ」そして「自己の死が他者にとってもつ意味」に関する質問を中心としながら、語りにおいて自由に現れてくる意味づけを分析の対象としている。具体的には「これまで身近な人を亡くされた経験はありますか?そのときのことを詳しくお聞かせ願えますか?」、「死後の世界、あるいは浄土や極楽についてはどのように思われますか?」、「ご自身の死というものが、残されたものにとってどのような意味をもつと思いますか?」に対する返答である。また間接的な質問のほか、状況に応じて「また浄土で会えるという思いはおありになりますか?」あるいは「俱会一処という言葉がありますけれども、それについてはどのように思われていますか?」といった直接的な質問も行った。

インタビュー時間は平均で3.5時間であり、回数は1回が6名, 2回が4名である。なおインタビュー内容は1件(対象者I)を除く全ての対象者の許可を得て、MDレコーダーを用いて録音された。

表1 対象者の属性

	性別	年齢	立場	時間	回数
A	男	74	住職	1.5	1
B	男	76	前住職	2.5	1
C	男	82	前住職	3	1
D	男	78	前住職	4	2
E	男	79	住職	4.5	2
F	男	80	前住職	1.5	1
G	男	85	前住職	2	1
H	男	88	前住職	1.5	1
I	女	80	坊守	9.5	2
J	男	74	住職	5	2

* 対象者の属性は調査実施時のものである。

**坊守とは寺を守る人という意味であり、住職の配偶者のことである。

3-2. 分析手順

分析手順は、やまだ(2003)に準じた。具体的には、まずインタビューで録音された内容をテキスト、すなわち文字記録に変換することで1次データの作成を行った。1次データをどの程度精緻なものにするかは研究目的によって異なるであろうが、本研究では語り口や抑揚などよりも意味内容に着目している為、主として内容の把握が平易なものを目指した。

続いて1次データから2次データへの加工が行われた。この際、語りの文脈をより深く理解する為に最低3度、通読するよう努めた。なお2次データへの加工は、1つの発話の読点ごとに区切り、通し番号をつけたものである。ただし読点による区切りでは意味が読み取れない場合やいくつかの文が同じ意味を有している場合はそれらを1つの纏りとした。

さらに本研究の問いに関連すると思われる意味づけ、すなわち死者と生者の関係性あるいは俱会一処そのものに言及する語りを抽出し、カードに変換する作業を行った。なお最終的にこの段階で得られたカードは44枚である。

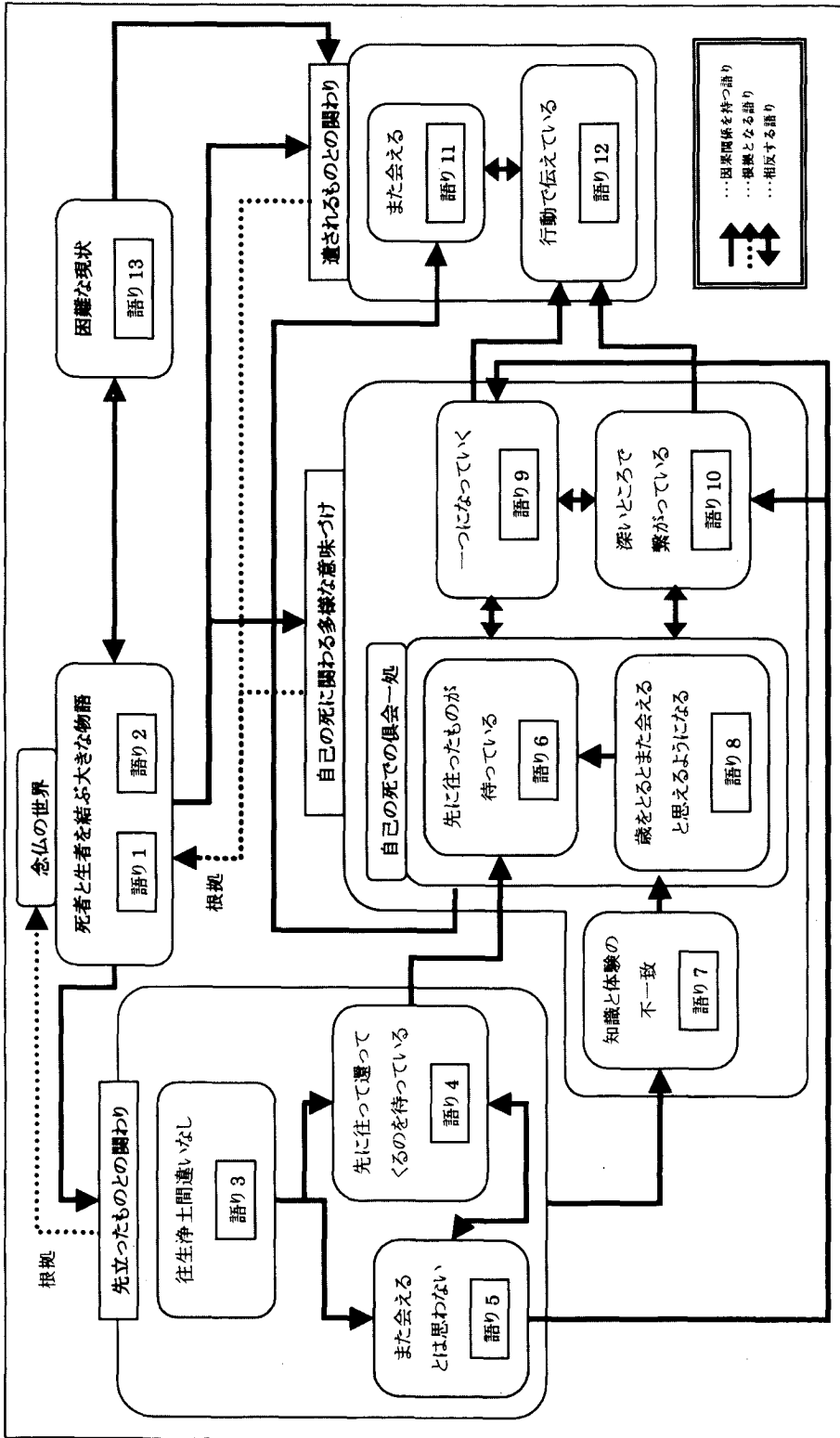


図1 KJ法による死者と生者を結ぶ物語の諸相

抽出されたカードは一枚の模造紙上に並べられ、意味のまとまりを成すもの同士で集められた。7割程度のまとまりが得られたところで個々の意味づけを反映したラベル、つまり加工された意味づけを作成した。これらの手順を繰り返し、下位ラベル、中位ラベル、上位ラベルそれぞれの作成を行うことで最終的に5つのまとまりを得た。その上でラベルの位置を決め、中身を展開し、模造紙上に貼り付ける作業を行った。さらに線や矢印で意味づけ間の相関関係および因果関係を表した。

4. 結果と考察

分析の結果、大きく5つの相互に関連する意味のまとまりが得られた。すなわち図1に見られるように、「死者と生者を結ぶ大きな物語」、「先立ったものとの関わり」、「自己の死に関わる多様な意味づけ」、「遺されるものへの関わり」、「困難な現状」である。なお図1はKJ法による分析の結果を示したものであるが、これは自己の死における俱会一処を中心とした死者と生者を結ぶ物語の様々な相を示したものである。表2はそれぞれの意味のまとまりと対象者の対応関係を表にしたものである。以下、具体的に考察していく。

表2 意味づけと対象者の対応関係

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
<死者と生者を結ぶ大きな物語>	○	○	○	○	○	○			○	○
<先立ったものとの関わり>										
往生浄土間違いない	○		○	○	○	○			○	○
先に往って還ってくるのを待っている			○	○					○	
また会えるとは思わない	○				○			○		
<自己の死に関わる多様な意味づけ>										
先に往ったものが待っている			○	○		○	○		○	
知識と体験の不一致		○							○	○
歳をとるとまた会えると思えるようになる		○							○	○
一つになっていく	○							○		
深いところで繋がっている	○									
<遺されるものとの関わり>										
また会える		○				○			○	○
行動で伝える				○			○	○		○
<困難な現状>	○		○			○		○		

4-1. 死者と生者を結ぶ大きな物語²

浄土系仏教において、浄土で再び会おうという言葉は、念仏の教えをいただいたもの、つまり浄土真宗の信者同士の合言葉でもある。そして死に逝くものと遺されるものとともに往生浄土という一つの物語を有することではじめて、語り1に見られるように、死を新しい生への入り口である浄土に往生する、ありがたいものとして受けとめることができるのであり、逆にそれが明確でない場合にはいつまでも悲しみに囚われるのである。

さらに阿弥陀経において説かれているように、往生浄土は同時に俱会一処、すなわち極楽浄土においてまた再び会えることをも意味する(教学伝道研究センター、2004)。そして語り2において見られるように、同じ信心に生きた人びとは、みな浄土で会うことができるとの確信を持つことは、愛するものとの別離における苦しみ、悲しみを和らげてくれるものなのである。

語り1 死者と生者を結ぶ大きな物語 (E)

E: たぶん大正か明治の末期かなー、のことだと思いますけども、あの一、能登のなんちゅうかな、作家の人がね、書いた作品があるんですけども。それにやっぱりね、人生の別れのことが書いてあるんですよ。あの一、自分の娘が、当時の結核ですよ。今の癪みたいに思われとったんですが、結核なって死んでいくんです。その娘が死んでいくときにね、そのお母さんがその娘に対して、あんた死ぬんじゃないてね、生まれ変われしてもらうさかい、ありがたいと思うて、お念仏申しあげ。とそういう言葉をかけているということが小説の中で出てるんですよ。これは当時の能登の人生の別れの挨拶だと思うんですよ。あんた死ぬんじゃない、お浄土に生まれ変わらしてもらうんだと。しかも仏さまにならさせてもらうんだから、それはありがたいことだと言ってるんですよ。だからありがたいと思うて、お念仏申しやとこういう言葉をね、お母さんが娘に対して、かけてるんですよ。これは当時のやっぱり能登のみんなそういう別れがあったと思うんですよ。これはねー、あそこはね、見舞いに来た人がね、その娘さんのそばで静かにお念仏を2、30分唱えて帰っていったちゅうんですよ。これはやっぱりね、みんながね、やっぱりその、念仏の教えというものに、あの、いただいておらなければ、そういう状況は成り立たないと思うんですよ。これはやっぱり、平素からね、やっぱりその念仏の教えというものに生かされて、必ず浄土に往かせてもらうんだと、そういうことを死んでいく人も、生き残ってる人もね、みんながそれがあるからこそね、そういうことが言えるわけであるし、受け取れるわけでしょう。やっぱり、あの一、残った人にとっても、往生浄土ということがはっきりしておらないといつまでも悲しみだけなんですよ。悲しみと迷いだけが残ってるんですからね、ああ。それやっぱり気の毒ですよ。

語り2 死者と生者を結ぶ大きな物語 (J)

J: あれ、悲しいと思うのは、やっぱり、ほんまに別れてまうと思ってるんでしょうね。

K: あー、そうですね。

J: うん。で、還っていく世界がもう確信できたら、また出会える世界があるということでしょう。あの、阿弥陀経の中に、あの一、俱会一処という言葉しとってですね。あれと一緒に。ともに一つのところで出会うということが書いてん。悲しいけども、その悲しみがそれを、そんなものやなしに、先に、わーと沸いて出してしまうことはないね。

ところで上記の語りは、僧侶という立場からの浄土真宗の教義についての解説である。そこでこれらの語りを根拠として、対象者自身が自らの近いものと自己自身をどのように結びつけているかを、以下具体的に考察する。

4-2. 先立ったものとの関わり

a. 往生浄土間違いなし

死者と生者を結ぶ物語の具体的事例として、語り3に示した意味づけが挙げられる。語りに見られるように、浄土真宗におけるもっとも典型的な物語の語りなおしである、亡くなっていくものも遺されるものもともに念仏を唱える中、喜んで浄土に参らせてもらい、さらにそれにより往生浄土は間違いなく、安心できるとする語りは多くの対象者において繰り返し語られるものである。

なおこの語りの背景には、死者と生者を結ぶ大きな物語において見られた念仏の世界がること

は既述のとおりである。

語り3 往生浄土間違いなし (C)

C; お念仏唱えて、みんなにお世話になった言うて、喜んで、まああの、お浄土へ参らせてもらえた。死んでいったし。その、悲しかったけども、やっぱりねー、ええ。まあそういう意味では、ま、お念仏のねー、お陰でこちらもね、悲しかったけども、まあまあ。だけどもね、お浄土へ向かえてもろてることには間違いないさかい、そのことが一番、あの、安心で、そない心配は何もしなかったですからね。せんで良かったですから。

b. 先に往って還ってくるのを待っている

死者と生者を結ぶ物語をより具体的な形で表した語り4に見られるように、ともに出会えることは平生において常に語られることで互いに共有されているものであるため、臨終の間際に改めて確認することは必要ないという。これは川島(2004a)において浄土真宗の宗教的関わりの中核的要素として呈示された平生業成³の重要性を、僧侶も自らの体験を通じて認識していることの現れであるといえる。

ところでこの語りの内容は、結びの機能として冒頭で紹介した高木(2001)のものと非常に類似している。高木は、冒頭の事例を『マッチ売りの少女』の物語を原典として物語が作成されたものとして紹介しているが、「天国」と「浄土」の違いはあるものの、その私ヴァージョンの物語において「待っている。」という意味づけが死に逝くものと遺されるものを結びつけている様は同じである。したがって原典となる明示的な聖なる物語のほかにも、暗黙裡のうちに個人に影響を及ぼしている文化の物語、すなわち日本文化に根付いたより大きな物語が存在するのかもしれない。この問題については後ほど改めて取り上げる。

語り4 先に往って還ってくるのを待っている (D)

K; その、まあ、日ごろお念仏で、(お母様は) すごく信仰深い方だとご住職自身が感じているわけですよ。けれども亡くなられたときに、すぐにお浄土に還られたということは思わないんでしょうか、ご住職自身が。

D; あ、亡くなったから浄土に参ったなと、そういうことやなしにね。ま、もうお浄土に還ることは分かっていますからねー。もう本人も、あー、死んだらお浄土へ往くと言っていますから。そやからそんな話はないし、気持ちもないし、ああ、亡くなったなということだね。まあ、亡くなったんかなと。やがてまた共に会えるから、もう先往って待ってる言ったからね。

K; ああ、お母様が。

D; そら、そこ行くまでの話で、色々話してるときにね、まー、どうせお母さんそんな長生きせんけども、お母さん往ったらね、私から言ったら兄ね、***も往ってるし、そやから私も往ってまた今度あんたらが還ってくるの待ってるよーと言うて、言うてくれてたし。もう平生、家庭でもそういう話しょっちゅう出るからねー、ええ。だから改めてなんやかんや言うようなことはないですね、もう。

c. また会えるとは思わない

一方で、語り5に見られるように、浄土で再び会えるという意味づけとは異なり、そのようには思えないとの語りも見られた。ただし往生浄土への確信が得られることによって両親の死を良かったと語っていることに注目すれば、これは往生への確信が必ずしも浄土で再び出会えるという意味づけを導くとは限らないことを示していると考えられる。

語り5 また会えるとは思わない (E)

K：先ほど（両親の死について）、あっけなかったと仰っていましたが、そのときに往生されたというようなことを仰ったと思うんですが、ということは後で会えるというような感覚というのはあるんでしょうか。

E：うーん、後で会えるてのは。そうですね。特にそういうのは（なかった）。まあ良かったなーちゅう感じですね。良かったなーちゅう感じですよ、うーん。そういうことじゃないでしょうかねー。

4-3. 自己の死に関わる多様な意味づけ

a. 先に往ったものが待っている

語り6は俱会一処を自らの死について採用したものである。別言すれば、自らが死んだ後は先立った家族や友人にまた会えるという意味づけである。ただしこの意味づけが成就されるためには、当然先立ったものが浄土に往っているとの確信がなくてはならないだろう。その確信があるからこそ、自身が浄土に往けばまた会えると思えるのである。したがって先立ったものとの関わりの語りにおいて見られたように、他者の死においても往生浄土間違いなく、先に往って待っているという意味づけが構築されることではじめて、自己自身の死の意味づけとしてこの俱会一処が採用されるといえる。

そして老年期にあるものの比較的健康であるため普段あまりこの意味づけを考えることはない対象者に対しても、漠然とそう思えることが死に対する楽観的な見方をもたらしているのである。

語り6 先に往ったものが待っている (G)

G：私が死んだら後は仏さんに任せてとさっきから言ってきましたけども、後は阿弥陀経のなかに書いてあるようなああいうとこで安穩に、何も考えんとおんのかなーと思いますね。

K：なるほどー。その、阿弥陀経のなかでも、お浄土に還るっていいですか、そういう面もありますよね。そういう面と先に往かれた方にまた会える世界、共に一緒に会えるというー

G：ええ、そういうことになってるので、それはもう、そこにまた先に往ったやつが待ってんのかなと。

K：うーん。あんまり普段考えられないかも知れないですがー

G：そうですね。あんまり深く考えてないですね。言われてみると、あんまり考えてないですね。

K：それでも何かしらそういうことなのかなという。

G：そうそう。どことなしにね。

b. 歳をとるとまた会えると思えるようになる

ともに出会える世界があるという意味づけが死者と生者を容易に結び付けるとは限らない。たとえば語り7において見られるように、肉親の死という衝撃的な出来事に直面したとき、それま

で習得してきた知識から往生浄土そして俱会一処という言葉を理解することができてもそれが本当のことは思えないという、知識と体験の不一致という事態が起こりうるのである。また語り8からは、二人称の死についての意味づけから一人称の死の意味づけへの移行には時間的推移が存在することが示唆されている。

つまり年齢を重ねることで知識と体験および他者の死の意味づけと自己の死の意味づけが一致するようになるのである。

語り7 知識と体験の不一致 (J)

J: あ、仏法的な今のような話してうちの母との別れはしたとは思えないですね。やっぱり肉親という悲しみが、先行しておいて、御浄土がどうか、そんなことは思わない。

K: 思わない。

J: 思っておらなかったですね。ただ、こういう世界、お寺の世界で育ってますから、あ、御浄土に往ったんやろなーと、言われたことを鸚鵡返しに、そう考えるだけだね、うん。御浄土に、往くと言われる、言われていることは、自分の知識としてあるけどもねー。母が往くと。これが往く姿とは、もう、正直言って思えないですね。

語り8 歳をとるとまた会えると思えるようになる (B)

B: だけど、若いときはね、やっぱり正直言うてねー、寂しさ、悲しさの方が先来ますわな。しかし、我々のような年になってきますとなー、ね、また会えるって言う何があるんですよー。その極楽、所謂浄土で。そういうことがお経にある。俱会一処という。その、ほんまにそうやなと思うようになりますねー。ああ、思うてますよー。

c. 一つになっていく

浄土教においてともに浄土で会おうとの言葉はとくに念仏の精神を顕著に示すものとされるが、今日ではそれが非科学的であるとの見方もまた一方で存在している。語り9は、浄土に還り、そこでともに出会えるとする物語はいわゆる一つの方便なのであり、実際には人間同士が出会えるということなどありえないとの語りである。そして形に囚われることなく、往生浄土とは一つになっていく世界であり、それが表現を変えれば出会えるということなのだと捉えている。

これは往生浄土という聖なる物語を引用しながら、「一つになっていく」ことで死者と生者の関係性を紡ぐ、別の結びのヴァージョンであろう。

語り9 一つになっていく (H)

K: 例えば、人によっては死んだら仏さまのもとへいくであるとか、すでに亡くなった方ですよ、まあご家族であったりに、俱会一処、会う世界があると仰ったりしますけども。まあ教学的にはあるのかもしれないですけども、ご住職自身としてはそれほど考えたりしないのでしょうか。それともー

H: いや、やっぱりあーそうしておれば必然的に、お浄土、まあ仏となる同体の悟りを開かしてもらうんだと。言うこと。そうすればその世界では所謂表現すれば会うちゅうんかね、一つになっていく。そういう、往ったら仏、形になんとかに囚われる、概念だけの問題ですけども、一つになっていく世界。そこにまあ出

会いもあるでしょうし、うん、それだと思うんですよ。人間こう形に囚われたり、言葉に惑わされたりしやすいんですけどねー、そこから先はわしは分からんと。弥陀同体の悟りちゅう、この宇宙の中に遍満しておる仏、っていうのをね、その中に入ってくんや。具体的になんや人間がこんには、言うような形じゃなしにね（笑）。そういう出会いはあると思う。うん、出会いといえばね。一つに統合されていく、一如の世界。うん、それだと思うんですよ。どうも人間姿や形に囚われやすいんでね。

d. 深いところで繋がっている

死者と生者が深いところでは繋がっているとの意味づけが語られる語り10もまた、往生浄土そして俱会一処という聖なる物語の別のヴァージョンである。言い換えれば、往生浄土と俱会一処の物語をそのまま引用した語りにおいては、「会えるから繋がっている」との意味づけがなされるのに対して、ここではそれらの物語を引用しつつ、「会えなくとも繋がっている」との意味づけがなされているのである。

またこの語りは「一つになっていく」と同様、経験できない世界について固定観念で語ることを自戒するものである。それ故、浄土について、あるいはそこで出会うということについては分からないとの立場である。

語り10 深いところで繋がっている (A)

K：お父様のお話をお聞かせいただいたように、本人の信心が、個人の中だけでなくて、共有というか、みんながそういう風に思っている、というとおかしいのかもしれませんがー

A：まあ、それぞれの受け取り方は違うとは思いますが、深いところではやっぱり地下水のように繋がっていると思いますけどね。

K：あー、地下水のように、あー。それは息子様であったり、奥様に対してもそのようにやはり。

A：はいはい。

K：それはやはり日ごろの行いを通じてー

A：うーん、どうでしょうか。私たちも普通の俗人と一緒ですから、怒ったり怒られたりそういう世界がありますけど、やっぱり許しあえる世界があると思いますね。

K：個人の受け止め方は違うけれども、やはり。

A：ばらばらではあるんですけども、どっかで繋がっている。まだ抵抗勢力ですから、息子はまだ。

K：抵抗勢力（笑）

A：はっはっは。若いからまだ。

A：ま、しかしあの、色んな運営とか行政とかその他については意見の対立はありますが、やっぱりその、ものの見方、考え方はよく似たり、段々似てくるなっていう風に思いますね。

K：ものの見方。そういうこともやっぱり先ほどの生命の共感というか、細かいところでは異なるけども、根本では繋がっているというー

A：そうですね、はいはい。やっぱり、俱会一処もそうだと思いますけどね。

4-4. 遺されるものとの関わり

a. また会える

浄土でともに出会えるという意味づけによって、先立ったもの、そして死に近く自らを結ぶことができれば、それは自らの死後遺されるものをも結ぶことができる。語り11は、Bさんが語った言葉であるが、また会えるという言葉が自然に口からこぼれるようになるという。

ただし、この語りは先立ったものに対する語りとその内容は同一ではあるものの、もはや今生では会うことが叶わない先だったものへの関わりと、今はまだ現世において会うことが叶う遺されるものとの関わりとは区別することが必要であろう。とくに語り4において見られたような、自らを死に逝くものとして位置づけ、積極的に遺されるものに「待っている」と伝える語りとは大きく異なっている。

語り11 また会える (B)

B: 俱会一処、それがねー、やっぱりその、あってね、誰のときやなー、また会えるやんて言うたことありますねん、私。ほんまに言うたことあるんですよー。また会えるやんって言うて、うん。

K: ああー。

B: そやそやそや、弟や。弟の嫁が死んだときや。うん。弟の嫁が死んだときやね。弟に言いました、うん。また会えるやんて。そういうことが言えるようになるんですなー、うん。これ他の人が聞いたら、何を言っているねんなー、んな夢みたいな話。会えるか会えんか分からんのに。ねえ、うん。

b. 行動で伝える

先立ったものとの関わりにおいて見られたような、先に往って待っているという語りは直接的には現在の家族に語っていないとするものもある。そのかわりに語り12に見られるように、日ごろのお勤めや行いを通じて暗黙のうちに感じ取ってくれていると語られている。

ただしこの意味づけは、往生浄土や俱会一処は言葉で語るのではなく、「日々の行動を通じて、背中で教える」ものであるという、対象者が持つ男性性へのイメージと無関係ではないとも考えられる。その意味において対象者の9割が男性であることの影響は少なくないだろう。

語り12 行動で伝える (D)

K: そういう(また会えるという)話はいま、ご住職もお子様とか、お孫さんとかにされたりするんですか。

D: 孫のほうとはあまり言うてないですけどね。けども、晩は一緒に全部お勤めますし、手を合わせてやるし。で、なんかのところで自然に培われてきてるんちゃいますか。ま、これは教えてやるもんっちゃいますからね、勉強じゃないんやからね。体をもってね、それをまたこちらの姿を見ながら、こっちはむこう見ながら。

4-5. 困難な現状

死者と生者を結ぶものとして、浄土でともに出会えるという物語の様々な形をみてきたが、現代社会においてこの意味づけが生成されることの難しさについても語られている。つまり、語り13に見られるように、一昔前のように家族全員に見守られながら死ぬことは稀であり、それゆえ

死に触れる機会や物語を共有する機会が減ってきているのである。

同様の語りは、門徒などへの宗教的関わりにおいても見られるものである（川島，2004a）。核家族化や病院死の増加といった社会的背景によって、死を取り巻く環境は一昔前とは大きく様変わりしている。死に逝くものと遺されるものが「浄土に還り、そこで会える」という物語を共有することは、今後ますます難しくなるのかもしれない。

語り13 困難な現実 (H)

H: まあそういう機会が、みな入院してね、亡くなっていくんでね。だから家で死ぬるちゅう姿が、いま亡くなったということは子どもに対しても、孫に対してもね、非常にこう隔絶された環境ですねー。みーんな家で死んで、遺体をとりこんで泣いたもんやけどねー。それがなくなりましたねー。

5. 総括的考察

5-1. まとめ

本研究により、先立ったもの、遺されるもの、そして自己自身をどのように結びつけるのかが明らかとなった。

第一に、自己の死に関わる語りにおいては、往生浄土の物語は共通して引用しながら、往生浄土の物語は必ずしも俱会一処の物語と結びつくものではないこと、そして俱会一処の物語の引用に関しては幾つかのヴァージョンがあることが明らかとなった。すなわち死者と生者が浄土で再び会えるという物語においては、「会える」との意味づけによって死者と生者が結びつけられるのに対して、一つになっていく世界であるとする物語や浄土で会えることはないけれども繋がっているとする物語では、「一つになっていくこと」や「どこかで繋がっている」との意味づけによって死者と生者が結びつけられているのである。ところでEさんが「往生浄土の問題は阿弥陀さんにお任せ。」として「自己の死に関わる多様な意味づけ」を語っていないことは、死後の理想世界としては語られない往生浄土の物語の存在を示唆するものである。本研究では死後の理想世界という物語が担う機能を明らかにすることを目的としてきたため、この「語られない物語」については十分な検討を行うことができなかった。今後の課題である。

一方、やまだ（2000）は西洋文化の伝統とは異なる日本文化における死生観として「大きな生命体のなかの人の生死」という概念を呈示している。つまり個々の人間は「自然の大きな生命体」の一部にすぎず、そこから生まれ、そしてそこへ還っていくという考えであり、これはまさに「浄土に還る」という物語が象徴的に表しているものであろう。しかし本研究の結果から個々の結びのヴァージョンにおいては、「還ること」そのものを重視する意味づけと、還って「出会うこと」を重視する意味づけの両方が見られており、とくに後者の結びのヴァージョンから、やまだ（2000）が西洋文化における死生観の例として掲げた人間と人間が向き合う対話も、「浄土に還る」ことを前提としつつ、わが国の死生観における結びの重要な概念であることが伺える。また「往く」という表現には「大きな生命体」へ還っていくことは含まれていないとも思われる。ただし浄土に「往く」と「還る」ことは概念上大きく異なると思われるが、両者を同様に扱い、語っているものも多いことから、明確に区別することは難しいのかもしれない。

これらの結果を踏まえ、今後は「還る」「往く」「会える」「一つになっていく」「繋がっている」

といった個々の結びのヴァージョンが、相互にどのような関係性を持っているのかを詳細に検討していくことが必要である。

第二に先立ったものとの関わりにおいてともに出会えるとの意味づけを成就した対象者は、自らの死後にもやはり先立ったものに出会えると語っていることから、両者は密接な関係性にあると考えられる。一方で、遺されるものとの関わりにおいては、一貫した連関は見られなかった。これには語り手が自らをどう位置づけるかが影響しているように思われる。つまり先立ったものとの関わりにおいて語り手は生者として位置づけられ、死者あるいは死に逝くものとの関係性に焦点化される一方で、遺されるものとの関わりにおいて、語り手の多くは死に逝くものとしてではなく、むしろ遺されるものと同じ生者として位置づけられている。物語が求められるのは自己と他者との関わりにおいて亀裂が生じたときであり、それを結ぶのが他ならぬ物語である。それ故、高齢者とはいえ比較的健康に生活し、家族との関係性を維持しているものにとって、そして自らと遺されるものを同じ生者として位置づけるものにとって、遺されるものとの関わりについての物語は未だ必要ないのかもしれない。

あるいは関係性の結び方の違いは、対象者が誰との関係性の維持を最も重要と認識しているのかによっても考えられる。たとえばその喪失がいかに大きなものであり、それを意味づけることがいかに困難であったのかを語っているIさんは、生前の夫との関係性や浄土での再会についての豊かな語りを呈している一方で、両親の死を自然に受け止めたとするEさんは、出会うことは方便であるとして多くを語らない。つまり死が、語り手の想定世界や関係性に大きな亀裂を生じさせない場合は、それらを結ぶ物語は必要とされないのである。したがって今後は物語が誰に対し向けられているのかを考慮しつつ、より詳細な結びの機能を同定していくことが必要であると思われる。

第三に「知識と体験の不一致」および「歳をとるとまた会えると思えるようになる」の語りからは、物語の発達経路が示唆された。ただし他者の死の意味づけから自己の死の意味づけへの移行過程を明瞭に語ったものは、Bさん、Iさん、Jさんの3名であり、そのほかは明確な転換期を語っていない。また現在の意味づけとして語られたともに出会えるという意味づけは、過去から序々に発達変化したものではなく、むしろ現在の状況によって過去の意味づけが変化したとも考えられる。引き続き研究を展開していくことで検証していくことが必要である。

5-2. 今後の課題

すでに幾つかの課題について述べてきたが、最後にさらに幾つかの問題について触れることで論を締めくくりたい。まず先立ったものとの関わりが豊かに語られる一方で、遺されるものに対しては対象者の多くがとくに語る言葉を持たなかった。ただしこれは本研究の対象者の9割が男性であったことと関係しているとも考えられる。したがって今後は女性対象者を増やすし、検討していくことが必要である。

さらに本研究では十分に触れることができなかったが、死者と生者を結ぶことを超えてすべての生命と繋がることや自然への畏敬の念なども、往生浄土や俱会一処の新しいヴァージョンである「一つになっていく」や「深いところで繋がっている」という意味づけにおいて散見された。また異なる原典を引用しながら類似した私ヴァージョンの物語を作り出すことも考えられ、それ

には特定の原典のほかにも影響を及ぼしている文化の物語が存在しているとも考えられる。今後は死生観と深く関連する、生命観や人生観、自然観を含めた幅広い範囲において流布している語りのジャンルを同定し (Bruner, 1999), それらと私ヴァージョンの物語がどのような関係性にあるのかを捉えていくことで本研究の知見を検討していくことが重要である。

付記

本研究は日本心理学会第68回大会において発表した内容をもとに、新たなデータを加え再分析したものである。

謝辞

本論文の執筆にあたり、丁寧なご指導をいただいた、やまだようこ教授に記してお礼申し上げます。また本研究にご協力いただいた浄土真宗本願寺派の僧侶の皆様にも心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Bruner, J. (1999). Narratives of aging. *Journal of Aging Studies*, 13(1), 7-9.
- 金児暁嗣. (1995). 高齢者の宗教観と死生観: 宗教は死を和らげるのか. 平成5年度ジェロントロジー研究報告, 51-64.
- 河合千恵子・下仲順子・中里克治. (1996). 老年期における死に対する態度. 老年社会科学, 17(2), 107-116.
- 川喜多二郎. (1967). 発想法. 東京: 中公新書.
- 川島大輔. (2003). 死の意味を捉えるインタビュー・プロトコルの探索: ある高齢者への面接を通じて. 日本心理学会第67回大会ポスター発表. (東京大学).
- 川島大輔. (2004a). 終末期への宗教的関わりの実際: 浄土真宗僧侶のライフストーリーからの探索. 教育方法の探求 (京都大学大学院教育学研究科教育方法学講座紀要), 7, 39-47.
- 川島大輔. (2004b). 死の関係論的意味づけ: 意味の享受者から伝達者への移転過程を辿って. 日本心理学会第68回大会ポスター発表. (関西大学).
- 川島大輔. (2005). 老年期の死の意味づけを巡る研究知見と課題. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 51, 247-261.
- 岸本英夫. (1973). 死を見つめる心: ガンとたたかった十年間. 東京: 講談社文庫.
- 教学伝道研究センター (編). (2004). 浄土真宗聖典 (注釈版). (第二版). 京都: 本願寺出版社.
- Lifton, R. J. (1973). The sense of immortality: On death and the continuity of life. *American Journal of Psychoanalysis*, 33, 3-15.
- 能智正博. (2004). 理論的なサンプリング: 質的研究ではデータをどのように選択するのか. 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ (編著). 質的心理学—創造的に活用するコツ (pp.78-83). 東京: 新曜社.
- 信楽峻磨. (2001). 心の時代 (NHK). 広島: トライエックス.
- 鈴木秀子. (1996). 死にゆく者からの言葉. 東京: 文藝春秋.
- 高木慶子. (2001). 死と向き合う瞬間 (とき). 東京: 学習研究社.
- やまだようこ. (2000). 死にゆく過程と人生の物語. C. ベッカー (編著). 生と死のケアを考える. (pp.45-65). 京都: 法蔵館.
- やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤田志穂・堀川学. (1999). 人は身近な「死者」から何を学ぶか: 阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより. 教育方法の探求 (京都大学大学院教育学研究科教育方法学講座紀要), 2, 61-78.

- やまだようこ・田垣正晋・保坂裕子・近藤和美。(2000). 阪神大震災における「友人の死の経験」の語りと語り直し. 教育方法の探求(京都大学大学院教育学研究科教育方法学講座紀要), 3, 63-78.
- やまだようこ。(2000). 人生を物語ることの意味: ライフストーリーの心理学. やまだようこ(編著). 人生を物語る: 生成のライフストーリー (pp. 1-38). 京都: ミネルヴァ書房.
- やまだようこ。(2003). フィールドワークと質的研究法の基礎演習: 現場(フィールド)インタビューと語りから学ぶ「京都における伝統の継承と生成」. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 22-45.
- やまだようこ。(2006). 喪失といのちのライフストーリー. 日本健康医療行動科学年報, 21, 31-48.

注

- 1 浄土真宗の宗祖である親鸞は、「この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまらせ候べし。」と述べ、死は終わりではなく浄土に往生生まれることであり、死別の後もまた出会える世界があること、すなわち俱会一処を明らかにしている(教学伝道研究センター, 2004: 785)。
- 2 死後の理想世界についての聖なる物語のどこからが原典で、どこからがそれを引用した私バージョンの物語であるかを明確に区別することは難しい。事実、浄土真宗がその教義の拠り所とする聖典は浄土三部経以外にも多数存在するため、僧侶が自らの物語を語る際、どの聖典のどの部分を原典として引用するのは多様である。したがってここではとくに、死後の理想世界に関連する俱会一処および往生浄土の物語のうち、自らの経験や感情に関連づけられていない、いわば教義解説の語りを、操作的に「死者と生者を結ぶ大きな物語」として生成した。またそれらの語りがドミナントであることの妥当性を確保するため、語られた内容が経典の記述と一致するかを確認している。
- 3 「平生」とは現在を意味し、「業」とは人生の大事業、即ち人生の目的である。そして「成」とは完成を意味する。つまり人間は現在生きている間に人生の目的を完成することができるというものである。しかしそのためには日ごろから仏法を聴聞することがとくに重要であるとされ、そこから僧侶の門信徒に対する宗教的関わりの中核的要素となっている。

(教育方法学講座 博士後期課程3回生)

(受稿2006年9月8日, 改稿2006年11月28日, 受理2006年12月7日)

Narratives of a Reunion with loved Ones: The Functions of Coupling the Deceased with the Living

KAWASHIMA Daisuke

Religion has provided several narratives of afterlife emphasizing Heaven and Pure Land, and they have long been used for moderating the fears of death. Especially, a narrative of a reunion with loved ones in Pure Land (Kue Isho) constitutes to fascinate elderly Japanese. This research focused on the narrative functions of coupling the deceased with the living. First, semi-structured interviews were conducted with elderly Buddhist monks, using the interview guide (Kawashima, 2003). Subsequently, the narratives were transcribed and coded to study the multiple meanings presented in these data more thoroughly. Then, five assemblages of meanings, i.e., master narratives of coupling the deceased with the living, relationship to the deceased, multiple meanings related to one's own death, relationship to the living, and difficult existing situations, were identified by using the Kawakita Jiro (KJ) method. The multiple relationships between the deceased, the living, and their own selves were then illustrated. As a result, several participants adopted the narratives of a reunion with loved ones in Pure Land (Kue Isho) and going to/ a reborn in Pure Land (Oujyo Jodo) to couple their own selves with the deceased in different ways.